

カトリックさいたま教区サポートセンター ボランティア活動報告④

第16チーム・2011年7月14日(木)～7月19日(火)

■湯本サポートステーション (福島県いわき市) (シスター2人、信徒男性1人、信徒女性1人、計4名)

1. 現地状況

- (1) 久之浜地区:いわき地区全体もガレキの整理が進んでいるが、現状では被災当時の状況がそのまま残っている地区。理由は、①いわき地区の一番北にあり、地震も津波も震源地に近く被害が大きかったこと、②そして東電福島原発から約35kmの地点であり、社協も当初はボランティア派遣をためらったこと、業者が入るのも遅れたことがあげられる。現在は放射能測定も確認できるため、整理が進んできた。
- (2) 小名浜地区:瓦礫の撤去が進み、被災した家屋と海岸沿いの一部が痕跡をのこしているのみで、被災当時の面影はない。福島マリナーパークも修復され開園。しかし新たな変化を小名浜教会・幼稚園で確認することができた。教会敷地内の大きなヒマラヤ杉(?)が業者により伐採されているところだった。理由は葉っぱの放射能測定値が高かったため(基準を超えているかは不明)、園児への影響を考慮して伐採を決めたとのこと。
- (3) 豊間地区、四倉地区など:小名浜と同じく、ガレキの撤去が進み、被災した家屋の痕跡が一部にあるだけとなっている。
- (4) 湯本サポートステーション(SS):教会聖堂は内部の整理が進み、次週取り壊し撤去の予定。物置として使用していた元女子修道院も同じ。修道院の屋根瓦の一部崩壊は被災以降来るたびに变化して進んでいる。それだけ余震が多く、古い瓦屋根の建物(聖堂と修道院)は取り壊し撤去が必要。ボランティアが居住する司祭館は問題ない。

2. 傾聴活動:

- (1) 中央台高久仮設住宅:7/15と7/18の2回傾聴

活動を行った。日々入居者があり、当日に入居したばかりの方もいた。子どものいる若い家族は子ども同士から始まる家族同士の交流があり、明るい面もある。中高年は働きに出たりして不在が多い。お年寄り、特に一人暮らしのお年よりは孤独感があり、話し相手を求めており、傾聴者を受け入れてくれる。家の中に入れてくれた方も数名いた。

- (2) 南の森スポーツパーク:7/16の炊き出し応援時に以前お話を聴かせてもらった方を訪ねた。こちらは富岡町、南相馬市などの地震・津波被災+原発避難区域の人たちが約20名残っている。
- (3) ビッグパレット福島(郡山市):7/17の炊き出し応援時に数人からお話を聴かせていただいた。こちらは原発避難区域の富岡町と川内村の大半が避難居住しており、役所機能、東電相談窓口などがある。全体では約500人程度が避難中だが、施設の隣接地に仮設住宅があり、ここにすでに多くが入居し、全体では700名程度が滞在。避難当初は約2,000人が避難していたという。

3. 炊き出し応援

- (1) 南の森スポーツパーク:小山教会(マキシム神父担当)を中心とした栃木フィリピン人グループ(約25人)による炊き出しが行われた。残念なことにここに滞在する避難者は22名と少なく、当日は外出者もありさらに少なかった。また行政が公表する人数は必ずしも実態を把握し切れていない。湯本SSはこうした炊き出しグループと現地の橋渡しを準備から当日終了まで行う。また我々ボランティアは炊き出しを手伝いサポートする。
- (2) ビッグパレット福島:川越教会、川口教会などのさいたま県南のヴェトナム人グループ(Sr.ランが取りまとめ)約50人と日本人5人による炊き出しが行われた。準備した食事700食分はわず

かに残ったものもあるが全て行きわたった。こちらは知的障がい者も数人見かけられ、今回は、ボランティアチームの若い人が相手をして喜ばれたし、最後までこのボランティアに寄り添っていた。こちらの皆さんは炊き出し歓迎。

4. 今後の課題

- (1) ボランティア初日の金曜日の午前はいわき教会で、傾聴グループ「みみ」と「情報交換と分かち合い」を行うことになった。最初の掛け言葉の相談を受けたが、お年寄りには「体調はいかがですか」などの健康を気遣うことば、中年や若い人には「(入居後) 落ち着きましたか」などのことばによって相手が話しやすいきっかけとなるので簡単に紹介した。
- (2) 今回はチームのシスターが体調を崩し、シスターは我々のために祈るというボランティアをしてくださった。いろいろなボランティアの仕方があるのだ。こういう時にこそ、我々のボランティアチームと多くの後方支援との「つながり」が大切と考える。シスターを送って下さった氏家神父様、病院手配をして下さった地元の方、通院に付き添った常駐スタッフに感謝したい。

5. 最後に

傾聴は難しく考えず、語る人に対する好意的関心の持続（無条件で相手の人を受け入れる）と語る人の心の内側の中心部分をずれないように感じ取る（そういう思いで生きてきたんですね）姿勢があれば十分です。そして聴く人自身がなによりも安定していないと無理です。これらは私たちの信仰の恵として与えられるものであり、感謝しています。皆さんと大阪からの方たちにも感謝。

[今回の活動報告は、ボランティアの武井さんが書かれた報告書からの抜粋を転用させていただきました。心から感謝いたします。さいたま教区サポートセンター広報担当]

第17チーム・2011年7月21日(木)～7月26日(火)

■湯本サポートステーション（福島県いわき市） （シスター1人、神学生2人、信徒男性1人、計4名）

金曜日午前中は、中央台高久の仮設住宅へ湯本サポートステーションのビラをポスティングした。今後、このビラの内容を改良して配布することをセンターに提案する。ステーションで昼食をとった後、いわき市の傾聴ボランティア・グループ「みみ」から、傾聴についてのミニ講座を受け、ふたたび仮設住宅へ向かう。一緒に活動する中で、その対応の仕方に学ぶものが多々あった。

土曜日午前中は小名浜教会での物資運びを手伝い、その後前日と同様に、別の仮設住宅でポスティングを続ける。お昼頃に近くの支援バザー、お祭りの見学をした。その後の数日は、仮設住宅を回ってポスティングと傾聴活動をした。お話しするうちに、被災者の方々と仲良くなり、お茶に招いていただく機会もあった。

月曜日には、湯本教会のお聖堂の取り壊しのため、業者が訪ねてきた。



写真1：湯本ステーションで、物資などの搬送に使用する軽自動車「キャブオーバ」が教区事務所に到着。早速、ジャン・ルーカ神父によって祝別され、湯本に派遣された。

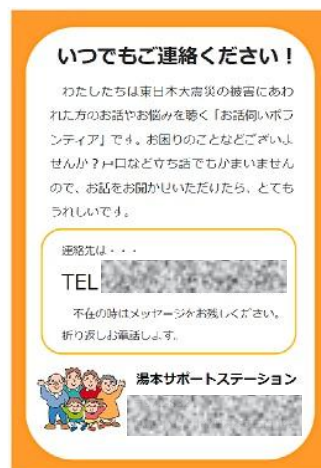


写真2：湯本ステーションのちらし